
大学生探偵シリーズ イギリス館殺人事件

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大学生探偵シリーズ イギリス館殺人事件

【Nコード】

N8575E

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

宏明達四人は宏明の母方の親戚の家に泊まりに行く。四人は楽しく過ごすつもりだったが、殺人事件が起こってしまう。

親戚の家

「うわー、すごい!!」

京子が今までにない感嘆の声を出した。

「そうだな!」

隣にいた茂も同感している。

今、四人は大きな洋館の前にいる。

「まるで外国みたいよね!」

紀美は目を輝かせて言った。

「とにかく中に入ろうか」

そう言うと、宏明はそそくさとインターホンを押した。

残りの三人も宏明の後に続く。

宏明がインターホンを押してから、約一分程すると中年の女性が出てきた。

「あら、宏明君! 早かったわね!」

その女性は、宏明を見ると嬉しそうな声を出した。

「叔母さん、お久しぶりです」

宏明は軽く会釈をした。

「宏明君の大学の友達ね?」

宏明の叔母は、宏明の後ろにいる紀美達に気付いた。

「そうです」

「さあ、どうぞ。中に入って」

宏明の叔母は、四人を中へと入れる。

「恵子さんとみきさん、宏明君達をお部屋に案内してちょうだい」

「はい、わかりました」

二人の女性は、四人を部屋へと案内した。

「ヒロ、さっきの女性は…?」

部屋へ行く途中、京子が聞く。

「オレの叔母さんで春美さん。ホントは今の時間、パートに行っ

るんだけど、オレらのために休んでくれたんだ」

「そうなんだ。なんか、気さくで優しそうだね」

「うん、気さくな叔母さんだ」

三人には好印象のようだ。

「普段はあんなんじゃないぜ」

ボソッと呟く宏明。

「なんか言った？」

「いいや、なんでもない」

宏明は首を振りながら否定する。

「こちらがお部屋です。男女二人ずつ別れてお部屋のほうに…」
年輩の恵子が笑顔で言ってくれた。

「ありがとう」

宏明は礼を言うと、茂と共に部屋の中に入る。

「部屋の中もすごいじゃん？」

「うん。叔父さんがこういう部屋にしたかったらしくてな」

改めて、宏明もすごいなと実感してしまった。

「同じ日本なのに日本じゃないみたいだな」

「まあな。ここだけ別世界だもんな」

宏明は疲れを取るようにため息をついた。

今回、ゴールデンウィークを利用して宏明の母方の親戚の家に四人で三泊四日で泊まりに行くことになったのだ。

宏明が母方の親戚の話をすると、他の三人が行ってみたいと言いだしたため急遽、行くことになってしまった。

午後六時半、宏明達四人は宏明の叔父と叔母と養子の博文の七人で夕食を取るようになった。

「おいしいーっ!!」

「ホント！」

紀美と京子は声をあげる。

「喜んで嬉しいな」

叔父がナフキンで口をふいてから言った。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったね」

叔父の要望に三人は簡単に自己紹介をした。

紀美に至っては、

「紀美はオレの彼女だ」

と、宏明は補足すると、紀美は顔を赤くした。

「宏明君に彼女……」

叔母は驚きながら紀美の顔をまじまじと見つめた。

「初耳だな」

「ずっと言っていなかったからな」

「こちらの紹介しなくてはな。僕は宏明君の叔父の山崎広次だ。宏明君の母さんの弟だ」

「私は叔母の春美です」

二人共、笑顔で紹介してくれる。

「こっちは養子の博文。今から十二年前に施設から引き取ったんだ」
博文は三人に頭を下げる。

「この子は病弱だが、バイトはしている」

「ヒロとは従兄弟同士になるんだ」

「一応はな」

「家政婦の二人は、年輩のほうが恵子さんで、若いほうがみきさん。

恵子さんは十年前、みきさんは半年前からやってくれてるのよ」

春美は二人を見ながら紹介した。

恵子は堂々しているが、みきは恥ずかしいのか少しうつむいている。

「それにしても、家の外観もすごいけど中もすごいですね。まるで外国に来たみたい建物ですね」

京子が家中を見渡しながらか言った。

「僕がこういう家にしようって言い出したんだ。元々、外国が好き

で、若い頃はバイト代を貯めては、外国に旅行してたよ。特にイギリスが好きなんだ」

広次は三人に語る。

子供の頃から何度も聞いている宏明は、耳にタコである。

「イギリスには何回くらい行ったんですか？」

既に紀美は食事をする手をとめている。

「旅行では三回だよ。その三回のうち、一回は高校の時で家族で行ったんだ。残りは大学時代に行ったよ。三年の後期には、留学してイギリスに行ったんだ」

「イギリスが気に入ったんですね」

外国に行ったことのない茂は、羨ましげに言った。

「イギリス以外に行った外国はどこですか？」

京子はナイフとフォークを置きながら聞いた。

「アメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジル、中国の五カ国だ」

「へえ：そんなに…？ イギリスを合わせて六カ国か。英語圏の国は行ってるんだ」

紀美は感心している。

「まあね。僕は外国語大学に通ってたから、外国の歴史が知りたくてね」

広次は当時のことを思い出すように言った。

「義父さん、せっかくだから宏明さん達にイギリスのことを話してみては？」

春美の横に座っていた博文が、初めて口を開き、広次に提案した。

「そうだな」

広次はうなずいて、博文の提案を受け入れる。

「何の話をしようかな…」

少し考えてから、

「歴史とかの話をしようかな」

と、笑顔で言った。

——叔父さんがイギリスの歴史とかの話するのは初めてだな。いつ

も聞かねーし、話してもくれねーし…。

広次の笑顔を見つめながら、そう思っていた宏明。

「簡単に話をするけど、イギリス諸島は紀元前5000年に最後の氷河期が終わって、氷が溶けて水位が上がったため大ブリテン島とヨーロッパ大陸の間に、狭い海峡が生まれて、イギリスは島国となったんだ」

一旦、話を切ると、広次はワインを二口飲んだ。

「紀元前3000年頃、ヨーロッパから新たな人々が移住し始め、紀元前2000年前後にはドイツから大集団でやってきたんだ。彼らは青銅器を使い、石や木でヘンジと呼ばれる円形の祭場を作った。ストーンヘンジはその一つで、南イングランド中央部のソルズベリーというところに現存するんだ」

広次は説明すると、得意げな表情を浮かべた。

「ストーンヘンジって有名ですもんね」

「写真やテレビでは観たことあるけど、実際にはないな」

「ストーンヘンジは多くの考古学者が研究を行っているんだ。古代の人々は、太陽や月の動きを観察するものだけではなくて、仏教儀式の効果も高められるように石を並べたものらしいんだ」

広次はにこやかに微笑みながら言った。

「ストーンヘンジは大きな石を組み合わせて円形に配置したものらしいんだ」

「あなた、ストーンヘンジ以外の話をしたら？」

春美がナフキンで口を拭いてから、広次に言う。

「そうだな。イギリスのティータイムでは、午後四時頃のティータイムに茶菓を楽しむ習慣があるんだ。何を食べるかわかるかな？」

広次は四人に質問を試してみた。

宏明以外は考え込んでしまっている。

「ビスケット：ですか？」

恐る恐る、紀美が答える。

「あー、近いな。スコーンだよ」

答えを聞いた三人は、納得した表情をした。

「ジャムと共にスコーンに塗るクロテッド・クリームといい、牛乳を煮て固めたものなんだ。留学中に何度も食べたよ」

広次は遠い目で当時のことを思い出していた。

「イギリス人って紅茶好きだよな」

宏明の一言に、

「確かにそうだな。イギリスはミルクティと決まっているんだ」
うなずきながら説明する広次。

「親父のイギリスの話は、ガキの頃から変わってないよな」
背後から男性の声が出た。

全員が振り向くと、入り口にもたれかかるようにして、若い男性が立っていた。

「明じゃないか?! いつの間に?!」

広次は目を丸くする。

「ついさっきだ。食事時だろうと思って台所に来てみたら、親父がイギリスの話をしてたってわけだ」

明はテーブルに近付いて、ローフトビーフを一切れつまんで口に入れた。

「こちらは私の実の息子の明だ。大手の美容室で美容師として働いているんだ」

広次は茂達三人に紹介した。

三人は会釈をする。

「宏明も来てたんだな。そちらは友達か？」

明は宏明に聞く。

「うん。大学の友達なんだ」

「ふーん…。恵子さん、オレも親父と同じワインを持ってきて」

明は宏明の隣に座り、恵子に注文すると、恵子はいと返事をして台所へと向かった。

「みきさん、あなたもモタモタしてないで明に食事を持って来てちようだい!」

ブーツとしているみきに、急に人が変わったように怒りだす春美。

「あ、はい。今用意してきます」

注意されたみきは、慌てて台所へと向かった。

「全くあの娘は気が利かないんだから…」

春美はブツブツみきの文句を言う。

「そう言うなよ。みきさんも頑張って仕事やってるんだから…」

博文はみきを庇うように春美に言う。

「あの娘にはあれくらいのことを言わなきゃダメなのよ」

そう言うのと、再び春美は食事をする。

——また始まった。新人の家政婦にキツイこと言うの…。そんな中でも恵子さんは十年もやってくれてるから、忍耐強いよなあ…。

宏明は恵子の忍耐ぶりに感心していた。

「ところで明、仕事はどうしたのよ？」

「今日は六時で早上がりだったんだ。明日は休みだ。明後日、仕事だから明日の夕方には戻るけどな」

朝がよっぽど早かったのか、明は欠伸をしながら広次の質問に答えた。

「明さん、お食事をお持ちしました」

みきが明の分の食事を持ってきた。そして、恵子がグラスにワインを注いだ。

「ありがとう、恵子さん」

明は恵子に礼を言った後に、ワインを一口飲んだ。

「明日は夏美が来る予定なのよ」

春美はさっきとは違う明るい表情で言った。

「夏美さんっていうのは…？」

京子は失礼だと思いながら、春美に聞いてみた。

「私の五つ下の妹よ」

春美は快く答えてくれた。

「よく似てるんだよ」

横から広次が笑顔で言う。

「もう、あなたったら!」

春美は照れ笑いになりながら、広次の肩を叩く。

「宏明、後で話が…」

急に明が声を潜める。

「全然いいぜ。明兄さんの部屋に行く」

「ああ：悪いな」

「何の話をするのよ?」

二人の会話が聞こえていたのか、春美は二人に聞く。

「母さんには内緒だ。従兄弟同士の話だ」

明は手に持っていたナイフとフォークを置きながら答えた。

いつもの宏明

翌日、宏明達は遅くまで起きていたせいか、九時半過ぎに目覚めた。軽く支度をして、食パンと牛乳を食べ、四人は家の周辺を散策することにした。外に出ると、心地よいくらいの風が吹いている。

「ホント、素敵なお場所だね。都会と違って自然が多いし、空気が澄んでる」

京子は伸びをしてから、今までの生活を忘れるように言った。

「別荘でもいいくらいだね」

「家にするにしても高いんだろうな」

「きつと高いんだよ」

「…だろうな」

宏明以外の三人は、家を羨ましそうに見ながら語っている。

そんな中、宏明は考え事をしていた。それは、昨夜の明の話だ。

——明兄さんに好きな人か…。恋を实らせたいって言っていた明兄さんの表情、なんか切なそうだったな。

明が頬を赤くしながら、宏明だけに好きな人がいると話してくれたのだ。名前を聞いた宏明は、とにかく驚いたというところだ。

——あの人に恋してるとはねえ…。明兄さんのタイプってわけか。

「ヒロってば！」

いきなり京子の大声が宏明の耳元で聞こえた。

「なんだよ？ オレの耳元で大声出すなよ」

宏明は耳をふさぎ京子に言う。

「どっか穴場みたいなのこないの？」

「穴場ねえ…」

頭をかきながら、困り果てた表情を浮かべる宏明。

「家の中、案内しようか？ 叔父さんの書物室があって、広くて書物いっぱいあるんだ」

「じゃあ、家に戻ろう」

茂はうなずき言う。

「入っても大丈夫？」

「許可取れば大丈夫だ」

四人は家に戻り、広次に書物室に行くと許可を取ると、二階の奥に書物室に向かった。

中に入ると、書物がぎっしりと本棚が並べてある。

「すごいね。本がいっぱいあるんだ」

紀美は書物室を見渡しながら言う。

「叔父さんが外国好きだって言ってたからせいか、外国の本が多いね」

京子は一つ一つ手に取ってみる。

「読みたいんだったら借りていいぜ。ここにいる間に読み終えるんだったらの話だけど…」

「いいの？」

「うん。後でオレから叔父さんに言っておく」

「私、借りて読んじゃおう！」

そう言うと、京子は本を選び始める。

「ノンちゃんは借りないの？」

「借りるけど何の本にしようかなと思って…」

紀美は自分の興味のある読みたい本を選んでいる。

そして、二冊の本を選び手に取った。

「『赤毛のアン』と『あしながおじさん』か。私は中学の時に読んだよ」

「へえ：私は初めて読むんだ。まあ、アニメでは見たけどね」

「そっか。これからどうする？」

「部屋戻ろう。私、本読みたい」

紀美は二冊の本を見つめながら答える。

「じゃあ、戻ろうか。もうすぐで昼食だけど時間になるまでゆっくりしようか」

四人は書物室を出ると、部屋に戻った。

午後十二時半、昼食の時間がやってきた。四人は台所に着くと、昨夜の夕食で座った席についた。

全員が集まると、みきが一人で昼食を運んでくる。

「あれ？ 恵子さんは？」

博文がみきに聞く。

「さあ…。朝食の後片付けが終わった後に、“部屋でやらないことがあるから各部屋の掃除はみきさんがやっておいて”って言って、部屋に戻っていつてしまったんです。昼食の時間を始める十一時半になっても戻って来ないから、用がまだ済んでいたいのだと思って、私一人で昼食を作り始めたんです」

みきは博文だけじゃなく全員を見ながら答えた。

「変ねえ…。いつもの恵子さんなら用が済んでなくても出てくるはずなんだけどね」

春美は首を傾げている。

「オレ、見てこようか？」

「そうしてくれる？ 明、恵子さんの部屋わかってるわよね？」

「わかってるって。三階の右奥の部屋だろ？」

そう言うと、明は台所を出ていった。

「恵子さんどうしたんだろ？ 部屋で体調でも悪くなったのかしら？」

春美は顎に手をあてながら心配している。

「そうだな。体調悪くなって寝てるならいいけど、なんだか心配だな」

広次も心配しながら昼食に手をつける。

「しっかり者の恵子さんだけに心配だよな」

博文も心配そうにナフキンで口を拭きながら言う。

その時だった。三階から明の叫び声が家中に響いた。

宏明は立ち上がり、台所を出る。そのあとに全員もついてくる。

宏明が三階にある恵子の部屋に着くと、廊下で腰を抜かしてしゃがみこんでいる明がいた。

「明兄さん！ どうしたんだよ?!」

「あ…あ…あれ…」

明は声にならない声をだし、部屋の中を指をさしている。

宏明は明の指をさす方向へ視線を向けると、目を丸くした。

「け、恵子さん?!」

「宏明君!!」

広次が近寄り、宏明同様、恵子の部屋を覗いた。

「恵子さん!」

「入ったらダメだ!!」

宏明は中に入ろうとする広次を止める。

残りの六人も恵子の部屋を覗くと、表情を一変させた。

「とにかく、救急車と警察を!!」

宏明はみきに向かって指示する。

「はい、わかりました!」

すぐに返事したみきは、一階へと引き返した。

みきが救急車と警察に連絡してから約二十分して、二つがほぼ同時に到着した。

三階の恵子の部屋と三階の入り口は、立ち入り禁止のテープが貼られ、宏明達は居間で事情聴取を受けることになった。

居間で待っている宏明達は誰一人として口を聞かないままにいる。

広次と春美にいたっては、優秀な家政婦を失ったことに相当なショックを受けている様子だ。

しんと静まっている居間に警察官二人が入ってきた。

警察官の一人は、宏明や紀美がよく知っている人物だった。

「谷崎警部じゃん！」

京子はその場の雰囲気似合わない明るい声を出した。

「二葉君達どうしてここにいるんだ？」驚いている谷崎警部に、

「オレの親戚の家なんや。亡くなったのは、家政婦の寺島恵子さんだ」

宏明は説明した。

「そういうことか。私は谷崎です。こちらが……」

「田村です」

もう一人の三十代半ばの警察官が自分の名前を名乗った。

「警部！ こちらの奥さんの妹さんが来られました！」

制服を着用した警察官が居間に入ってきて言う。

「夏美！」

「恵子さんが亡くなったって本当なの？」春美によく似ていて、春美よりふくよかな体型の夏美が聞くと、春美は頷くだけだ。

二人は少し話をする、谷崎警部と田村刑事のほうを見た。

「では、お話を聞かせてもらいます」

谷崎警部がそう切り出した後、軽くため息をついた。

「家政婦の寺島さんが亡くなられた時刻は、午前十時から午後十二時までの二時間の間です。その間、みなさんはどこで何をされていたか？」

谷崎警部は手帳とペンを持ちながら聞いた。

「私は主人と買い物に行っていました」

最初に答えたのは、春美だ。

「何をお買いになられたんですか？」

「今日、夏美が来るからお菓子を買いに……。レシート見せましょうか？」

そう答えると、春美は和菓子店でもらったレシートを財布から出して、二人の警察官に見せた。

谷崎警部はレシートを受け取り見ると頷いた。

「午前十時三十七分か。この店はどれくらいかかりますか？」

「車で二十分くらいです」

次に答えたのは広次だ。

「そうですか。山崎夫妻には無理だな。じゃあ、あなたは？」

博文のほうを向いて聞く谷崎警部。

「小説を書いていました。趣味で書いているもので…」

博文はもじもじとして答える。

「勿論、お一人で、ですよね？」

「はい。部屋は一人部屋なんで…」

「では、あなたは？」

「オレは一人で部屋にいたぜ。残念ながら、アリバイを証明してくれる人間はいねーけどな」

明は頭をかきながら答える。

「家政婦さんは？」

「私は家事をしていました」

「二葉君達は？」

「オレらはこの家の外で散歩したり、書物室に行ったりしてたよ」

宏明が代表で答える。

簡単に全員のアリバイを聞くと頷く。

「みなさんのお名前をお伺いしたいのですが…」

遠慮がちに田村刑事が聞いた。

宏明達以外の名前を聞くと、二人は首を傾げた。

「失礼ですが、明さんと博文さんは兄弟なのにあまり似ていらつしやらないですね。特に博文さんは広次さんと春美さんのどちらにも…」

谷崎警部は明と博文を交互に見ながら言った。

「はい。明は実の息子なんですが、博文は養子なんです」

広次の説明に、二人の警察官は納得した。

谷崎もこれ以上は追及しなかった。

「事件の話に戻りますが、今のところアリバイがないのは、明さん、博文さん、みきさんの三人ですね」

「まさか…。オレらの中に犯人がいるとでもいうのかよ？」

明は動揺しながら谷崎警部に言う。

「そうではありませんが、一応、被害者と近い人間を疑うのが我々の仕事なもので…」

「みきさん、朝食後の恵子さんの行動は？」

田村刑事は手帳から目を離してみきに聞いた。

「十過ぎに宏明さん達が朝食を食べに来られて、十時半過ぎに宏明さん達の朝食の後片付けが終わってから、恵子さんがやらないといけないことがあると言って、自分の部屋に戻ったんです」

みきは小さな声でさっき宏明達に言ったことを、谷崎警部達にも答えた。

「家事は一人でしておられたんですよね？」

田村刑事は念を押すように聞く。

みきははい、と返事をする、と、田村刑事は手帳に目をやった。

「当然、部屋の鍵はみきさんがお持ちになっているんですよね？」

「いえ、全て恵子さんが持っていました」

「本当ですか？ 嘘を言っではいけませんよ」

「本当です」

怖い表情をして聞く、谷崎警部に、泣きそうな表情を浮かべるみき。

「みきさんの言ってることは本当です。部屋の鍵は全て恵子さんに預けていたんです」

広次もみきが嘘をついていないことを証明する。

「いいでしょう。後で調べたらわかることですから…」
ため息まじりで言った谷崎警部。

その言い方に涙目になっているみきは、今にも泣き出してしまいそう。

「警部、凶器は見つかったのか？」

「首吊りなんだが、太いヒモ状で殺害されている」

「首吊りだったら自殺なんじゃないの？　それで他殺だなんておかしくない？」

京子は谷崎警部の答えに納得がいかないようだ。

「自殺だと断定は出来ないが、他殺自殺の両面から見ているんだ」
谷崎警部は京子が納得するように説明した。

答えを聞いた京子は、そうなんだ、という表情をした。

「とにかく、今日一日は家から出ないで下さい」

「あの、オレは明日仕事あるんで家に戻りますけど…」

明は申し訳なさそうにする。

「ここに住んでるんじゃないんですか？」

「別のところで一人暮らしをしているんです」

「事件が起こった以上、ここにいてももらいたいですけどね」

谷崎警部は困ったなという表情をしながら頭をかく。

「すいません。明後日、仕事が終われば戻ってきます」

「わかりました。特別に許可しましょう。明後日には必ず戻って来て下さいね」

明が逃げないとわかったのか、特別に承諾した。

「わかりました」

明の返事を聞くと、二人の警察官は居間を出て行った。

午後四時半、特別に帰宅を許可された明は、自宅へと戻って行った。
春美は寝込んでしまった為、見送りは広次と博文だけだった。

宏明は現場となった恵子の部屋へと向かった。

谷崎警部からは恵子の部屋に入ってはいけないと言われていたのだが、宏明はそのことを無視したのだ。

——自殺…。ホントにそうなのか？　自殺するような理由でもあつ

たのか？ 叔父さん達に聞いてみないとわからないけど、昨日、見た時点では自殺するって感じじゃなかったけどな。

宏明は恵子の部屋の中を見渡しながら思っていた。

——特に変わったところはないよな。

「宏明君」

女性の声で呼ばれた宏明が振り向くと、夏美が恵子の部屋を覗いていた。

「夏美さん、でしたっけ？」

「そうよ」

夏美は頷きながら、部屋に入っていた。

「初対面よね」

「はい。夏美さんのお名前は叔母さんからお聞きして存じてました」
宏明は夏美のほうを向き直り言った。

「私も姉から聞いてて知っていたわ。なんでも大学の痴漢事件を解決したとかで…」

「あれは自分からやりたいと言い出したことなんで…」

「それに、男前で頭もよくて身長も高いし…自慢の甥だって言ってたわ」

夏美の言葉にすっかり照れてしまう宏明。

「いや、そんな…」

「姉が言うのもわかるわ。いい青年だわ」

夏美は頷きながら言う。

「で、どうなの？ 恵子さんの事件は…」

「うーん…今のところなんとも言えなくて…」

困り果てた表情をする宏明。

「自殺じゃなかったらいいのに…。だって、恵子さんは山崎家の家政婦として仕事はきっちりしてるし、なんたって輝いてたもん」

夏美は机の上に置いてある写真立ての中の笑顔でいる恵子を見つめている。

「もし、殺人なら誰が殺ったのかしら…？」

「この家で殺人なんか出来る人はいないはず」

夏美の意見に、否定する宏明。「そうよね。じゃあ、外部の人間ってこと？」

「まだわからないけど、恵子さんが亡くなった時刻は全員がそれぞれ別行動してたからなんとも言えなくて…」

宏明は腕組みをして答える。

「——ちゃんと調べたわけじゃないけど、この部屋に何か仕掛けをしたとかそういうのはなさそうだしな。」

「遺書はなかったのかしらね？」

「さあ…。警部が何も言ってなかったから、遺書は発見されなかったんじゃないですか。発見されてたらオレらに伝えてるはずだし…」

「やっぱり他殺なんじゃ…？」

「オレもそう思います。だけど、他殺だという証拠が…」

他殺だと思う宏明だったが、正直なところ証拠がないため、他殺だとうとう証明していいのかわからなくて内心焦りでいっぱいだった。

宏明の中で警察が自殺と処理してしまうことが、一番恐れているのだ。

「——これは自殺だ。警部に言っておかないと…。」

宏明は確たる証拠がないまま、漠然とそう思っていた。

「他殺…？」

宏明の言葉に手帳を見ていた谷崎警部が顔を上げた。

あれから宏明は夏美と別れて、警察へと直行したのだ。

「他殺という何か証拠はあるのか？」

「いや、証拠ってのはないんだけど…」

「証拠がないとなんとも言えないな」

少し強く言うと、谷崎警部は再び手帳に目をやった。

「それにいつもの二葉君じゃないじゃないか」

手帳に目をやった谷崎警部は、そっと宏明に目配りをさせて言った。

「え…？　いつものオレ…？」

宏明は谷崎警部の言っていることがわからず首を傾げる。

「いつもの二葉君ならきちんと証拠を持ってきて、筋を通して話すじゃないか」

証拠もなしに他殺と言い出す宏明に、何かおかしいと感じた谷崎警部。

「そりゃあ、そうだけど…」

指摘されて思わず、うつむいてしまう宏明。

「親戚の家政婦ってこともあるのかもしれないが、先走らんといてくれよ」

「大丈夫だよ」

「恵子さんでどういう人だ？」

谷崎警部は話題を変える。

「仕事がテキパキ出来る人だ」

「いつ頃、山崎家に来たんだ？」

「十年程前。なんでも旦那と離婚して職がないもんで、どこか住み込みで働きたいという要望で、叔父さん達の家に来たらしいぜ」

当時、小五だった宏明が、夏休みに兄二人と三人で広次の家に遊びに行った時に、春美がそう話していたのを、今でも鮮明に覚えている。春美に紹介された恵子は、少し恥ずかしそうにしていたが、宏明には第一印象は良かった。

「そうだったのか。みきさんのほうはいつ…？」

「半年前だ」

「みきさんは入ったばかりだったんだな」

「うん。大学卒業した後、一年半、飲食店の正社員で働いてたみたいけど、家の事情で辞めてしまったみたいだ」

みきと初めて会った日、広次に聞いたのか、母が話していたのだ。

「家の事情…？」

「詳しいことは聞いてないからわからない」

母も谷崎警部同様に、“家の事情ってなんだ？”と質問したらしいのだが、みきは話にくそうな表情をしたため、それ以上は聞かなかった。

「そうだったのか…」

「叔母さん曰く、“みきさんはまだまだね”って言ってたぜ」

「まだ半年だからな。余談はそれくらいにして、一番、聞きたいことがあるんだが…」

谷崎警部は咳払いをした。

「なんだよ？」

「博文さんの事なんだ。養子らしいが…」

谷崎警部は少し聞きにくそうな表情をする。

「十二年前に施設から引き取ったんだ。博文さんが小五の時に山崎家に来たんだ。オレは小三だって、叔母さんの妹の夏美さんの息子だと思ってたんだ」

博文と初めて会った日のことが、宏明の脳裏に浮かんた。小五にしては、宏明より身長が五cmくらいしか違わなかったし、顔色も冴えなかった。

不思議に思った宏明が、春美に聞くと、“身体の成長が遅いだけ”としか答えてくれなかった。

それからというものの、広次の家に行く度に、明と博文と遊ぶことがあったが、どうしても“博文君”とは呼べずに、今日まで過ごしてきた。

「夏美さんの息子じゃないと気付いたのはいつ頃だったんだ？」

「小五の秋くらい。兄貴が教えてくれたんだ」

宏明は机の上で指を組んだ。

「明さんとはどっちが上だ？」

「明兄さん」

即答した宏明に、谷崎警部は頷きながら、

「わかった。広次さんの家にはいつまでいる予定だ？」

「五月六日までの予定でいるけど…」

「そうか。早く帰らないと広次さん達が心配するぞ」

谷崎警部はこれで話は終わりだというふうに立ち上がった。

「オウ！　くれぐれも事故と処理しないでくれよ！」

宏明は忠告しながら立ち上がる。

「大丈夫だよ」

笑顔で宏明の忠告を受け止めてくれる。

宏明は久しぶりに谷崎警部の笑顔を見たような気がした。

そして、谷崎警部は宏明に一つ言っていないことがあった。

みんなの不安

その日の夕食、春美と明以外の全員は台所に集まった。台所では誰一人として会話をしていない上に、広次はあまり食が進んでいない。そんな広次を見るのは、宏明の胸中は複雑だった。

「みきさん」

広次は疲れた声でみきを呼んだ。

みきはいいと返事をする、広次の側に近寄った。

「春美に何か食べ物を持っていてくれないか？ 何も食べないでいるのは身体に悪いから…」

「わかりました」

「軽い物でいいよ。僕達が食べている物では、春美はいらないって言うかもしれないからね」

広次はナイフとフォークを置いてから、みきに伝えた。

みきはお粥を作ることにした。

「広次さん、これからどうするの？ 新しい家政婦さんを入れるの？」

夏美は心配そうに広次に聞いた。

「今のところ、新しい家政婦さんを入れる予定はない。当分、みきさん一人で頑張ってもらうつもりでいる。春美とも相談して決めたんだ」

「そうなんですか…」

「ところで、宏明君、さっきどこに行ってたんだ？」

広次は宏明に顔を向けて聞いてきた。

宏明は一瞬、行き先を隠そうと考えたが、隠さずに答えることにした。

「警察に行ってたんだ。谷崎警部に伝えたい事があって…」

宏明は答えながら、なぜ広次が行き先を聞いたのかわからずにいた。

「そうか。恵子さんは他殺なのか？ 自殺なのか？」

そのことについて、一番知りたい様子の広次。

「まだ調べてる段階でわからないみたいだ」

「早くどちらか断定してもらいたいもんだな」

博文は小さい声で言う。

「そうだな。もし、他殺だとすれば、この中に犯人がいるんだな。そんなこと思いたくないから、自殺だと断定してくれたほうがありがたいんだけどな」

広次は目を伏せる。

「いや、自殺ではないぜ。恵子さんは殺害されたんだ」

宏明ははっきりと全員に伝えた。

初めは言わないでおこうと思った宏明だったが、こういうことははっきり伝えておくべきだと思ったからだ。

「なんだって？」

「ヒロ、いいのかよ？ そんなこと言って…」

茂は心配そうに宏明の耳元で言う。

「大丈夫だ」

宏明は強気で茂に言い返す。

「でも、さっき警察は自殺か他殺かわからないって…」

「仮に自殺だとしても何か細工してあると思うんだ」

「細工…？」

「きちんと見てないからまだわからないけど…」

宏明は水を飲んでから答える。

「他殺という証拠はないけど、必ず恵子さんを殺害した犯人を探し出すぜ」

「水を刺すようで悪いが、その話はなしにしないか」

広次は今までにない険しい表情で言った。

「叔父さん…？」

突然の広次の険しい表情にキョトンとする宏明。

「今回だけは自殺だと思いたいんだ。春美だってそうなんだ。この十年間、恵子さんは山崎家でよくやってくれた。私達にも何か原因

があったのかもしれない。だけど、恵子さんは私達のためによくやってくれたんだ」

広次は恵子の死に悔しい思いでいっぱいである。

――叔父さん……

「だから：誰かに殺害されたなんて言わないでくれ」

険しい表情から一変、悲しい表情を宏明に向けた。

「わかった。オレこそ叔父さんに辛いこと言っただけ」

素直に謝る宏明。

「いいんだ。宏明君は何も悪くない」

広次も宏明の気持ちに理解を示した。

午後十時、宏明達は風呂に入りそれぞれの部屋で過ごすことになった。

宏明はベットに寝転がり、昼間の出来事を思い返していた。

――叔父さんには悪いけど、自殺なんかじゃない。恵子さんの首吊り自殺にはしつくりこない。一体、どこがしつくりこないんだろ？

宏明はため息をつきながら、反対のほうに向くと、眉間にシワを寄せる。

――それに今日のオレら以外の全員、どこか変だ。一夜の間に何があつたというんだ？

「オイ、怖い顔して……。恵子さんの事件、考えてるんだろ？」

茂は宏明の横に座って聞く。

「まあな」

「どうするんだよ？ 叔父さんは自殺にしてくれって言ってるけど

……」

「そうなんだよな。オレは他殺だと思ってるけど、叔父さんに自殺にしてくれって言われるとどうしようもない。……かといって、他殺

だからって自殺にして欲しいと言ってる叔父さん達に隠れてコソコソと他殺の証拠を探したくないしな。：どうしよう？」

今回ばかりは身内の家政婦が被害者なだけにどう動いたらいいのかわからない。普通にやればいいのだが、叔父に他殺ではなく自殺だと言われてしまえば、動きにくいのは確かだ。

「この際だし叔父さん達に言ってしまうえば？　そのほうが気が楽だし、コソコソしなくてもいいだろう？」

茂は明るい口調で言ってくれる。

「茂の言うとおりにしてみようかな？」

「そのほうがいいぜ。やるなどと言われると余計にやりたくなるんだろ？」

茂の言ったことに笑ってしまふ宏明だが、茂の言ったことは本当である。

「それにしても、一体誰が恵子さんを殺害したんだろ？　わざわざ自殺に見せかけて…。自殺に見せかける理由は何かあるはずなんだけどな」

宏明はベットから起き上がり立ち上がった。

「どこ行くんだよ？」

「叔父さんに今の自分の気持ちを伝えに行く」

「今の気持ち…？」

「恵子さんが他殺で、犯人を探したいってこと」

「ああ：一人で大丈夫か？」

「大丈夫だ」

翌日の朝、山崎家は重々しく明けた。

昨夜、宏明は広次に「自分は恵子さんの死が他殺だとは思えない。だから、恵子さんの死を無駄にしたいためにも犯人を見つけたい」と、しっかりと自分の気持ちを伝えたのだ。

始めのうち、広次は渋っていたが、宏明の思いに圧倒されて承諾したのだ。そして、部屋を出て行く宏明に、広次はこう一言付け加えた。「あまり無茶はしないように」と――。

朝食は全員そろって台所に集まった。

春美に関しては、半日以上しか経っていないのにも関わらず、一気に老けてしまったように見える。

そんな中でも紀美や京子は明るい話で恵子の話題を避けようとしている。

みきは焼きたてのパンとスクランブルエッグをそれぞれ大きな皿に盛ってきた。

「みきさん、牛乳を早く人数分持ってきてちょうだい！」
疲れた中でも、少しイラつかせた口調でみきに指示する。

「あ、はい、すいません」

みきは急いで冷蔵庫から牛乳パックと食器棚から人数分のコップを出した。

――こんな時にでもみきさんに指示を出すんだな。

宏明はパンを頬張りながら感心している。

「恵子さんがいたらな……」

ボソッと呟く春美。

「春美……」

「恵子さんは殺されたのよ」

春美はやつれた表情をさせながら言う。

「なんてことを言うんだ。恵子さんのことは自殺にしておこうと言ったじゃないか」

急に恵子は殺されたと言い出た春美に、広次は驚きながら春美の肩に手を乗せた。

「私はどうしても恵子さんが自殺だと思えないわよ」

「姉さん、なんでそう思ったの？」

「恵子さんが自殺する理由なんてないもの。例えば、遺書が見つかったとしても私は自殺だと信じないわ」

涙目で言う春美。

そんな春美に下を向いてしまう広次。

「宏明君、どうか犯人を見つけて」

「わかった。なるべく早いこと探すようにする」

宏明は神妙な面持ちで春美に返事した。

「もし、犯人がわかれば話してくれるかい？」

広次はまっすぐ宏明を見て聞いた。

「ちゃんと話すよ」

「恵子さんについて聞きたいことがあればいつでも言って」

疲れた表情の春美は聞いた。

宏明はパンを口に入れたまま頷いた。

「今日のみんなの予定は…？」

広次は全員に聞く。

「オレらは特に…」

「僕も。今日はバイトも休みでないし…」

宏明と博文は交互に答えた。

「夏美さんは？」

「私も何もないわ」

「そうか。それぞれに行動するとまた何かあったら嫌だしな」

答えを聞いた広次は、今日一日どうしようか悩んでいる様子だ。

「居間にいるというのはどうですか？」

悩んでいる広次に、茂は提案した。

「そうだな。気分が優れないなどは自室にしてもいいが…」

広次は茂の提案に賛成した。

——確かに叔母さんの言うとおり、恵子さんの遺書が見つかったとしても、恵子さんの自筆じゃないと意味がない。

「叔母さん、あとで恵子さんの事を聞きたいんだけど…」

宏明は早いうちに恵子の事を知りたいと思ったのだ。

「いいわよ」

「出来れば、恵子さんの履歴書とかあればいいんだけどある？」

「確か、あったはずよ。どうして…？」

春美は首を傾げる。

「恵子さんの事あまり知らねーから少しでも知るためにな」

「そう。わかったわ。後で私の部屋に来てよ」

「この事件、解決するの？」

博文は宏明に聞いてきた。

「なんとしてでも解決してみせるぜ」

宏明は強気な口調で言った。

「履歴書はこれよ」

朝食後、宏明は春美と共に広次と春美の部屋へと向かった。

恵子とみきの履歴書を入れた黄色いファイルを手にとった春美は、

恵子の履歴書を宏明に手渡した。

「恵子さんて、保育士してたんだ？」

恵子の職歴を見ながら春美に聞く。

「大学卒業して十年間保育士として働いてたみたいよ」

「離婚して、この家に来たらしいけど…？」

「大学三回生の時に結婚して子供を産んだらしいの。その時は経済力がなくて、子供が一歳になる前に施設に預けて、恵子さんが三十五歳の時に離婚して、この家の家政婦になったってわけ」

春美はベットに腰を下ろして、恵子が教えてくれたことを宏明に教えた。

「その子供は今どこに…？」

「それは知らないわ。実際、施設に預けてから恵子さんも会ってないって言ってたから…」

春美の答えにしっくりこないでいる宏明。

——会ってないって言っても一度は会ってるとは思うんだよな。自分のお腹を痛めて産んだ子供なのに…。

恵子が春美に言っていた答えが、どうしても本当のことだとは到底思えなかった。

「恵子さんは外出したり何か趣味はあったのかよ？」

「学生時代からバレーボールが好きで、近所のバレーボール教室に二年間通ってたわよ。続けてもらっても良かったんだけど、仕事が疎かになるからって半年前に辞めちゃったのよね」
春美は悪いことをしたなという表情だ。

「恵子さんは誰かに狙われていたとかはないよな？」

「まさか…。なんでそんなことを…？」

逆に聞く春美。

「殺害されたくらいやから、過去に誰かに襲われた、とかあるのになって思ってたんだ」

宏明の答えを聞き、春美は右手に顎をあてて思い出している。

「そうねえ…今までにそういうことは聞いたことないからなかったんじゃない？」

「そっか…。殺害された理由がわかればいいんだけどな」

宏明は窓の外を見ながら言った。

「恵子さんはいい人だっていうことしか思い出さない。どんな時だって臨機応変にやってくれてたもの」

春美も窓の外に目をやる。

「そういえば、恵子さんの日記帳とかってある？」

宏明は春美のほうを向き聞いた。

「部屋にあるんじゃない？ 家政婦といえどもプライベートまでは立ち入らなかったから…」

「わかった。じゃあ、恵子さんの部屋に行ってみる」

「私も行くわ」

二人は部屋を出て、恵子の部屋へと向かった。

恵子の部屋は事件当時のままだ。だけど、恵子の几帳面な性格が出ていて、とても綺麗にしてある。

宏明は部屋に入ると、真っ先に机と近付いた。

「ノートが一冊入ってる」

宏明はハンカチを手袋代わりにして、引き出しを開けてから言った。

「どうやらその日出来事を書いて、失敗をなくしてたってわけか。思ったこととか書いてるみたいだけど…」

軽くパラパラとめくる宏明。

「借りていいかな？」

「いいわよ。宏明君の気が済むまでどうぞ」

春美は事件が起こってから、やっと宏明に笑顔を見せながら答えた。

全員が加害者

その日の午後、谷崎警部と田村刑事がやって来た。昨日の午後と同様、居間に全員は集まった。集まったといっても、午前中から居間にいたため警察が来たからといって居間に来るのが煩わしいと誰一人として思わなかった。

その後、宏明は恵子の日記帳と履歴書を持ち、事件の参考にすることにした。

「度々、すみませんな。事件のことでお話がありました：」

谷崎警部はみきが出した緑茶をすすった後に言った。

「いえ、とんでもない。で、お話というのは：？」

広次は谷崎警部が緑茶の入ったカップを置くのを確認してから聞いた。

「昨日、言わなかったんですが、恵子さんの部屋から遺書が見つかりまして：」

そう言いながら、谷崎警部は透明の袋に入った一枚のワープロ書きの紙を全員に見せるように置いた。

「“人生に疲れた。もう死にたい” これはどういうことですか？」
遺書の内容を読み上げた後、広次が谷崎警部に聞いた。

「恵子さんの机に置いてあったんです。昨日、みなさんにお見せすべきだったんですが、調べたいことがありましてね」

「調べたいことって：？」

京子が聞く。

「恵子さんの指紋がついているかどうかだよ」

「どうだったんだよ？」

「恵子さんの指紋しかついてなかったよ」

「そうだったんだな」

答えを聞いた宏明は考え込んでしまう。

「この家にワープロとかありませんか？」

田村刑事は広次と春美に聞いた。

「いえ、ワープロやコンピューターなどはこの家にはないんです」

「そうですか。じゃあ、ワープロが使えるカフェ、つまりインターネットカフェで印刷し、持ち帰ってきたんでしょうね」

田村刑事はそのことを手帳に書き込みながら言った。

「恵子さんが亡くなる前、どこかに出掛けたということはありませんでしたか？」

谷崎警部に聞かれた広次と春美は、思い出す表情をしていた。しばらくすると、春美が、

「そういえば、先週の木曜日に出掛けてくるって言って出掛けました」

思い出して答えた。

「どれくらいの時間ですか？」

「四時間程度だったと思います」

「どこの誰とどこに行ったかはわかりますか？」

「どこに行ったかはわかりませんが、昔の友達に会うと言ってました」

「昔の友達とは？」

「保育士をやった時の友達らしいです」

「保育士…ですか？」

田村刑事は手帳から目を離す。

「ええ…。若い頃にやってみたので…」次に答えた広次に、意外だという表情をする田村刑事。

「時間は何時くらいに出掛けましたか？」

「午後一時過ぎに出て、五時過ぎぐらいに戻ってきました」

春美は先週の木曜日の恵子が外出した時刻を正確に答えた。

「保育士の友達とどのくらいの時間会ってたなんてわかりませんよね？」

「それは…」

すまなそうに答える春美。

「どれくらいの時間、友達と会ったのかはわかりませんが、この時すでに自殺を決意をしていて、友達と別れた後にインターネットカフェへ行き、遺書を書いた、というところだな」

今までの春美の答えを聞き終えると、谷崎警部は田村刑事に言った。田村刑事も谷崎警部と同様の意見のようだ。

「恵子さんはなんで自殺なんかしなくちゃいけないんですか？」博文は谷崎警部に聞いた。

「表面上はわからなかったかもしれませんが。しかし、心の奥ではどう思っていたかは…」

谷崎警部は恵子は広次と春美のことを嫌がっていたというふうな口調で答える。

「私達が悪いっていうんですか？」

谷崎警部の答えに気を悪くしたのか、春美は少しイラついた表情をした。

「いえ、決してあなた方が悪いというわけではないですが、家政婦の身で弱音を吐けない、というのがあったんでしょ」

谷崎警部は内心焦りつつ、努めて落ち着いた口調で春美に言った。それでも、春美の表情は同じままだ。

谷崎警部は困ったようにこめかみを書きながら、ため息をついた。――ワープロ書きの遺書…。谷崎警部が言った、先週の木曜日の時

点で自殺を決意をしていて、インターネットカフェで遺書を書いたという意見にも一理ある。それにしても、昔の友達と会った帰りに遺書なんて書くと思うか？ せっかく会う友達のことを考えたら、遺書なんて書く気になれないってのが普通だと思っただけ…。

宏明はテーブルに置かれた遺書を見つめながら思っていた。

「先週の木曜日に会った保育士の友達の連絡先ってわかりますか？」

「わかりません。ケータイとかでわからないんですか？」

広次が逆に聞いた。

「それがケータイが見つからなくて…」

「え？ 部屋になかったですか？」

「ええ：どこにも：」

「恵子さんはいつも肌身離さずケータイは持っていたんです。私や春美や博文の連絡が入った時のためにね」

「そうなんですか」

「でも、働いていた保育園の名前はわかります」

急に思い出したのか、広次は言った。

「どこの保育園ですか？」

「木ノ下保育園です。堅市にあるみたいないんです」

「わかりました。では、さっそくですが調べてみたいと思います」

田村刑事は手帳に書いた後、キリっとした表情でなった。

「ところで事件の話から反れますが、このお屋敷すごいんですね」

そう言うと、谷崎警部は居間を見渡した。「学生時代に留学や海外旅行をして、色んな国を回ったんです。中でもイギリスが気に入りました、イギリスと似たような家を建てたいと思って建てたんです」

「ほう：。何カ国ぐらい行かれたんですか？」

「六カ国です」

広次に答えに、驚いた表情をする谷崎警部。

「そんなにですか。私なんて外国に行ったことないもんで羨ましいです」

「結婚してからは新婚旅行で行ったくらいで、あとは行ってませんがね」

広次は頭をかきながら言う。

「失礼ですが、夏美さんご結婚は：？」

田村刑事は少し小さな声で聞いた。

「してますよ。高二と中二の息子が二人います。今回、家族でここに来る予定だったんですが、息子が“お母さん、久し振りに姉妹で仲良くなってこいよ”って言うもんで、私一人で来たんです」

田村刑事の質問にも嫌な顔をせずに答える夏美。

「旦那さんもそう言ってくれたんですか？」

「ええ、もちろん」

「いい旦那さんご子息をお持ちなられたんですね」

「いえいえ、そんな…」

両手を振りながらの夏美。

「では、長くなりましたが、私達はこれで…」

二人が立ち上がると、広次と春美も立ち上がった。

「何か気付いたことがあれば、私達に言っ下さい」

谷崎警部がそう言う、広次ははいと返事した。

谷崎警部達が帰ると、再び居間で各自やりたいことをすることにした。だが、居間には紀美、京子、茂、みきの四人しかいない。

みきは広次から“夕食の仕度まで居間にいてくれたらいい”と指示してしたのだ。その指示にみきは家事から解放されたという表情をした。

残りの五人は自室へと戻っていった。宏明の場合、恵子の事件について考えるために部屋へと戻ったのだ。

宏明は部屋に戻ると、恵子の日記帳を手にした。

途中まで読んでいたのだが、恵子の気持ちが切々と伝わってきた。結婚や離婚のこと、子供を施設に預けたこと、山崎家の家政婦になって住み込みで働くことになったこと…今まで全てのことが記されていた。

——あんなにタフでいたけど、ホントは子供に会いたかったに違いない。それにこここの家政婦になった時、不安で仕方なかったと思う。谷崎警部のいうとおり、弱音を吐きたかっただろうし泣きたい時もあったかもしれない。恵子さんのことを思うとやり切れねーよな…。恵子の日記帳を読みながら思う。そして、軽いため息をつく。

——恵子さんみたいな女性が母親だったら良かったな…。

宏明がそんなことを思っていた瞬間、

「きやああああ」

春美の叫び声と共に、ドスンという音がした。

宏明は急いで部屋を出ると、音のしたほうへと向かった。

「叔母さん！」

宏明が着くと、階段の下で左足をさすっている春美を見つけた。

「どうしたんだよ?!」

「後ろから誰かに押されたのよ」

春美は痛そうな声で答える。

「春美！」

「姉さん！」広次と夏美、二人の後ろには博文がいる。

居間からも紀美達がやって来る。

「みきさん、救急箱を！」

みきは頷くと、救急箱を取りに行った。

「とにかく、居間に行こう」

広次はそう言うと、春美を抱き抱えた。

一行は居間に向かうと、みきが手当てをして一段落終えた。

「誰なの?! こんなことをしたのは?!」

春美は怪我をしたのにも関わらず怒り心頭だ。

「早く名乗ったらどうなの?!」「まあ、落ち着いて。叔母さん、

押された時の状況を聞かせて欲しいんだ」

怒る春美になだめながら言った宏明。

「トイレに行こうとしてたの。そして、階段まで来たら突き落とされたのよ」

「二階にいたのは宏君と広次さんと博文さんと夏美さんと春美さんの五人だし、春美さんを突き落とせたのは残りの四人ってことになるけど…」

紀美は不安げな表情を宏明に向ける。

「そういうことになるけど、紀美達はずっと居間にいたのか?」

「うん、ずっといたよ」

「じゃあ、僕らの中に…?」

博文は腕を組みながら聞く。

「ああ、そうだ」

「でも、宏君は…」

「オレも二階にいたんだ。当然、今回の加害者になる可能性があるんだ」

「そんな…」

紀美はそんなの嘘だという表情になる。

「恵子さんの事件を含めて、オレら全員が加害者だ。事件解決するまで協力しあっていこう」宏明は全員に力強く言った。

みんなの期待

事件のことが何もわからずに翌日の朝を迎えた。今日は明が戻って来る日だ。朝八時半過ぎに明から電話があり、仕事が終わってからになるから午後七時過ぎに戻って来る予定になっている。

宏明のほうも恵子の事件と春美が突き落とされた件について何もわからないままだった。

夕方、宏明は紀美と散歩がてら警察へと向かった。

谷崎警部は暇だったらしく、すぐに対応してくれた。

「あれから何かあったか？」 谷崎警部はイスに座ると聞いてきた。

「いいや、全く…」

首を横に振りながら答えた宏明。

「こっちも全くだ」

「そういえば、警部にはまだ言っていなかったけど、叔母さんが誰かに二階から突き落とされたんだ」

「えっ?!」

「叔母さん、突き落とされてカンカンだぜ」

「で、怪我のほうは？」

「左足をネンザで終わったし、大事には至らなかった」

宏明は谷崎警部が出してくれたコーヒ―を啜りながら答える。

「そうか。その時、二階にいたのは誰なんだ？」

「叔母さん以外には叔父さん、博文さん、夏美さんにオレだ」

「紀美さん達はどこにいたんだ？」

今度は紀美のほうを向いて聞いた谷崎警部。

「私は居間にいたよ。京ちゃんと相川君、みきさんの四人で喋ってたんだ」

「まあ、命あっただけでも良かったが、恵子さんみたいになったら大変だ」

谷崎警部は少しホッとしたような表情をした。

「確かにな。犯人を許せないよな。恵子さんを殺して、叔母さんまで突き落として…」

宏明の中で犯人を許せないでいた。それは、紀美も同じだ。

「事件のせいでゴールデンウィークが台無しよ」

紀美は頬をふくらませながら言う。

「恵子さんの件が自殺だと思いたいけど、春美さんがこんなことになるとはなあ…」

谷崎警部もこんなことになるとは思ひもしないでいた。

「でも、なんのために春美さん突き落としたんだろう？ 恵子さんだけを狙ってたんだったら、春美さん突き落とさなくてもいいのに…」

紀美は首を傾げながら言う。

「犯人の狙いは、恵子さんと春美さんの二人だと考えると手っ取り早いんじゃないか？」

「恵子さんと春美さんの二人が、標的ってこと？」

「恵子さんと春美さんを何かの目的で襲った、というところか？」
乗り気になってきた谷崎警部。

「まあ、何かの目的ってのはわからんが…」

谷崎警部はそうつけ加えた。

「警部の言うとおりだな。でも、もしそうなら、なんで恵子さんだけ殺害したんだ？ 叔母さんも殺害することも出来たはずなのに、突き落としただけにしたんだろう？ その理由がわかればいいんだけどな」

紀美と谷崎警部のやり取りを、黙って聞いていた宏明が口を開いた。
「一体、二人の女性の間に何があったんだ？ 二葉君、何かわからないか？」

「さあ…。あの家にはたまにしか行ってねーからなあ…。中学に入ってから特にな」

宏明ははっきりと答えたが、二人の女性の間の出来事を考えていた。
「中学に入るまではよく行ってたのか？」

「うん。今でも正月と盆は行くけど、中学入るまでは春休みや祝日も行ってたんだ」

谷崎警部は宏明の答えに納得した表情をした。

「中学に入ると部活とかで忙しいからな」

「ねえ、宏君、春美さんて最初に会った一昨日となんか違うくない？」

紀美は最初に来た時と今朝見た春美と比較して違和感を感じて、宏明に聞いた。

「気が強いんだ。気分屋だと言ったら早い。初対面の人には、ニコニコしてるけど慣れたらキツくあたるんだ」

春美を見慣れてる宏明は答える。

「宏君も怒られたことはあるの？」

「小学生の時は何度もあるぜ。兄貴や明兄さんとイタズラばかりしてな。当たり前のことなだけだな」

宏明の脳裏には、春美に怒られた過去が蘇った。

宏明や明が何か悪いことをすると、すごい声で怒鳴り散らした。イタズラ以外でも、何気ない一言でも気に入らないと怒られる。小学生の宏明には、とても嫌だった。

「叔母さんに会うのは嫌だったけど、明兄さんや博文さんと会うのが楽しみだから、家に遊びに行くのは嫌じゃなかったぜ」

「まあ、従兄弟同士だからね」

「博文さんとは血が繋がってないけど、従兄弟は従兄弟だからな。そろそろ家に帰ろうぜ。叔父さんや叔母さんが心配する」

宏明と紀美が戻ると、七時前になっていた。台所に向かうと、先に広次達は夕食を取っている。博文の横には、明が座っていた。

「オウ！ 宏明！」

明は宏明の顔を見るなり、手を上げた。

「明兄さん！　いつ帰ってきたんだよ？」

「ついさっきな。仕事が早く終わったんだ」「二人共、立ってないで座ったら？」

春美は宏明達に座るように促す。

「みきさん、二人の食事を持ってきて」

「はい、わかりました」

みきは返事すると、二人の食事の用意をする。

「仲いいよな。羨ましいくらいだ」

明が宏明と紀美を交互に見つめて言う。

「結婚までいくんじゃないか？」

「いけばいいけどな」

何気ない宏明の一言にドキッとしてしまう紀美。

――宏君と結婚だなんて…。

内心ドキドキしながらそう思ってしまったっている紀美。

「それにしても、母さん足は大丈夫なのか？」

「まだ痛むけど大丈夫よ」

「それなら良いけど、あまり無理はするなよ」

「わかってるわよ」

明に笑顔を向ける春美。

「宏明君、事件のほうは進んでるの？」

春美の突き落とされた事を思い出し、夏美は食事する手を止めて、宏明に聞いてきた。

春美も興味津々に宏明を見てくる。

「全くだ」

「犯人の目星も何もわからないの？」

「今のところは…」

「そうなんだ…」

春美は自分の期待はずれの答えになってしまい、しょんぼりした表情をした。

「明日、オレらは帰るけど、明日までには事件を解決してみせるか

ら…」

「一度、宏明君の事件を解決するところ見れるかな」

「大丈夫だ。見せたる」

——…といっても、明日までに解決するかどうか…。期待されればされるほど、少し重荷になってくる今日このごろだ。

自分の身の回りで事件が起けると、必ず宏明が解決してくれる、というのが重荷になっているのだ。

——最初に大学で痴漢騒ぎの事件を解決したのがマズかったかな。

あの時は痴漢騒ぎがなくなれば…と思つての行動だったんだけどな。宏明は誰にも気付かれず、そつとため息をついた。

夕食後に宏明は恵子の部屋へと向かうことにした。

宏明は何もしないまま明日に帰ってしまうのは、恵子も浮かばれないし、何しろ宏明自身、自分から逃げてしまうことになると思つたのだ。

宏明は恵子の部屋に入ると、まずは部屋を見回す。前回、入った時と何ら変わりはない。

恵子の机まで来ると、机の引き出しを全て開けてみた。特に印象に残るものはない。

次に大きな物入れを開けてみる。中にはアルバムが三冊入っている。

宏明はアルバムを手にとると、中を見た。二冊は恵子の幼少時代や学生時代、保育士時代など若い頃の写真のアルバムだ。

残りの一冊は、子供の写真だ。

——子供の写真…。叔母さんは一歳で施設に預けて、それから会ってないって言ってたけど、明らかに成長していつてる子供の写真がある。もしかして、施設の人に頼んでもらって写真なのか？

宏明は三歳くらいの子供の写真を見て思う。

そして、小学校入学の写真を見てピンときた。

——もしかして…この写真って…。

宏明は今回の事件のカラーがわかりそうになった。

——証拠はないけど犯人はあの人だと思うけど、どうして…？

宏明は恵子の部屋に、何か仕掛けが残っていないか探し始めた。

ベランダの鍵が壊れているのを見つけた。

——これは最近壊れたものじゃないな。この壊れたベランダの鍵を逆手に取って、あの人は恵子さんを殺害したんだ。

宏明は犯人とトリックを確信した後、春美に聞きたいことがあったので、居間へと向かった。

本当の親子愛

翌日の午前中、居間に宏明以外の全員と谷崎警部と田村刑事が集まった。

昨日の夜遅くに宏明は自分の考えをまとめた後に、広次と春美に、“事件の真相がわかった”と伝え、ケータイで谷崎警部にも伝えたのだ。

宏明が指定した時刻から十分が経って、春美がソワソワし始めた。

「宏明君、大丈夫かしら？」

不安そうな春美は、二階に続く階段の様子を窺いながら呟く。

「大学生ですよ。二葉君は毅然としながら推理しますから…」

春美の不安を打ち消すように、谷崎警部は春美に言った。

「いつも事件を解決する時は、毅然としてるんですか？」

広次は谷崎警部に聞いた。

「ええ…。まだ一回だけしか事件を解決してないんですがね。初めてですか？ 二葉君の推理してる姿をみるのは…」

「はい。痴漢騒ぎと社長さんが殺害された話は本人から聞いていたんですが、なかなか見る機会がありませんでしたから…」

「そうでしょうね…」

谷崎警部がそう答えた後、居間のドアが開いた。

「犯人がわかったって本当なのかよ？」

宏明の姿を見ると、すぐに明が聞いてきた。

明の問いかけに無言で頷いた宏明。そして、宏明は今回の事件の真相を話始めた。

「まずは恵子さんの事件からだ。恵子さんが殺害されたあの日、朝食後にやらなければいけないことがあると言っていた。そのことを知った犯人は、恵子さんを殺害するチャンスをもたらした。犯人は恵子さんの部屋まで行き、話があると言っても言い、中へ入った。そして、あることを話題に出して口論となり、あらかじめ用意していたロ―

プで恵子さんを殺害して、自殺に見せかけた」

広次や春美がいるせいか、少し緊張している宏明。

「殺害するチャンスって、前々から恵子さんを殺害するつもりだったってわけ？」

「そうだ。いつ頃から恵子さんに殺意を抱いたかはわからねーけど、最近抱いたってわけではないみたいだ」「アリバイはどうするんだよ？」

明は腕組みしながら聞いているが、リラックスしながら座っている。「あの日、オレらは別々に行動していた。疑われるが、一人でいた場合、部屋に一人でいたと言えば、他にも一人でいた人物はいたはずだ。もし、誰かと行動していれば、殺害時刻に何かしら理由をつけたら、とりあえずのアリバイは証明出来る。何しろ、オレや叔父さん達からこの家は身内だらけの家だからなんとも言えないけど……」

宏明はまだ少し緊張している口調で話している。

全員は互いに顔を見合わせている。

「しかし、誰かと行動していて犯行時刻に何か理由つけたとしてもバレるんじゃないですか？」

田村刑事は身を乗り出して聞いてくる。

「例えば、トイレに行くという理由で犯行をしましょう。トイレなんて五分もあれば用が足せる。そんな短い時間で人を殺害することが出来ない、というのが、頭の中にあるのが普通だ。五分以上かかったとしても、お腹の調子が悪いとでも言えば疑わないでしょう」

田村刑事は宏明の答えに妙に納得してしまっている。

「姉さんを突き落とした件についてはどう説明するの？ もし、居間にいた人達が恵子さんを殺害しても、姉さんを突き落とすのは無理なんじゃない？」

夏美の質問に、宏明は頷いてから、

「では、次に叔母さんが階段から突き落とされた件についてお話ししましょう」

そう言うと、全員の顔をゆっくりと見た。

「犯人は叔母さんも殺害するつもりでいた。最初は殺害せずに脅かすつもりでいた。ちょうどそんな時に自分の部屋から一人で出てくる叔母さんを見つけ、階段から突き落とした。そして、急いで部屋へと戻り何食わぬ顔でみんなと合流したってところだ」

宏明の推理に、春美はソファに座っている谷崎警部と田村刑事以外の全員を睨み付けた。

「叔母さんに聞きましたが、恵子さんには子供がいるんです。だけど、家庭の事実でやむを得ず施設に入れてしまったそうだ。時は流れて、今から十年前に旦那と離婚し、山崎家に家政婦としてやって来た。初めは分からずにいた恵子さんも山崎家に来てすぐに全てを悟った」

「全てを悟った…?」

「恵子さんを殺害し、叔母さんを突き落とした犯人は…あなたでしたか、博文さん」

宏明は博文のほうを見て、静かに答えた。

犯人の名前を聞いた全員は驚いているが、広次と春美のほうは何十倍も驚いている。

「まさか…博文が…?」

「そうよ。この子は病弱で、人を殺すなんて無理よ」

広次と春美は交互に驚きの声をあげる。

「病弱だと思わされていたんだ。確かに山崎家の養子に来た時は病弱だった。でも、この五年で病気は完治してしまったんじゃないですか?」

宏明の問いかけに、何も答えずにいる。

博文の反応を見て、そのまま続ける宏明。

「恵子さんを殺害した日、あなたは部屋にいる恵子さんに自分は恵子さんの子供だと伝えに行った。恵子さんは施設に預けて今まで会いに行かなかったことを詫びた。しかし、あなたは許すことが出来ずに、ロープで殺害した後、そのロープで恵子さんを自殺に見せか

けた」

「一人じゃ大変じゃない？」

紀美は博文を横目に宏明に聞いた。

「博文さんは大体170cm程の身長だ。恵子さんはもう少し低い160cm程だ。成人男性で少々大変だが出来るはずだ」

「鍵はどうするんだ？ オレが行った時、恵子さんの部屋は鍵がかかってたからこじ開けて入ったんだぜ？」

明は発見当時のことを思い出しながら聞いた。

「部屋に入る時はそのまま入ったんだ。恵子さんは自室の部屋の鍵を必ず閉めるらしいから、部屋の鍵を閉めたのは恵子さん自身でしょう。恵子さんを殺害後、もう一本長いロープを用意しベランダから出て玄関から入ったんだ」

「ベランダの鍵はどう閉めるの？」

京子の問いかけに、

「恵子さんの部屋のベランダの鍵だけ前から壊れてたんだ。私が修理しようって言ったんだが、恵子さんは修理しなくてもいいっていうもんだからそのままにしてたんだ」

宏明の代わりに広次が答えた。

「恵子さんを殺害した後、博文さんは自室にこもったんだ」

「証拠はあるのか？」

今までずっと黙っていた博文は、ふてくされた口調で口を開いた。

「恵子さんを殺害したロープとベランダから逃げたロープの日本だ。恐らく、探せば博文さんの自室にあるはずだ」

「見つかったって当たり前じゃないですか？ 僕の部屋なんだし、指紋がついていたっておかしくない」

「確かにそうよ、宏明君」

春美も同感している。

「じゃあ、台はどこ行っただんです？ もし、恵子さんが自殺したのなら、ロープを天井に吊るすために台に乗ったと思うんです。だけど、恵子さんの足元には台はありませんでした。それで、早いうち

から恵子さんは殺害されたんだと思ったんです」

「それで恵子さんが殺害されたって言ったのか」

茂はなぜ宏明が自殺ではなく他殺だと言っていたのか、ようやくわかったように納得した。

「もしかして、その台も博文さんの部屋に……？」

「そう。叔父さん、押し入れとかに台は入れてなかった？」「物置き場には入れてたよ。恵子さんが亡くなってから物置き場に用があつて言ったんだ。でも、置いてあつたはずの台が無くなっていたんだ」

広次は即答した。

「その台は博文さんの部屋にあるはずだ。その台の脚には、恵子さんの自室のカーペットの毛がついてるはず」

「……バレてしまったか……。そうだよ、僕が全て仕組んで殺ったことだ」

うつむき加減で認めた博文。

「博文、なんで恵子さんを……？」

明が信じられないという口調で聞いた。

「母さんは僕を捨てたからだ。物心ついた時には、施設にいた僕は、両親は僕を捨てたんだと思いがら、ずっと生きてきたんだ」

博文は立ち上がり答えた。

「十二年前、この家に引き取られた時、義父さんと義母さんが本当の両親だと思い、生みの両親の事を忘れようとした。そんな時、中一の時に母さんが山崎家の家政婦としてやって来た。当然、僕は母さんだとは知らなかったけど、今から五年前の二十歳の誕生日に部屋に呼び出されて、僕の本当の母親だと告げられたってわけだ」

二十歳の誕生日のことを思い出しながら話す博文。

「その時から恵子さんを殺害しようと思ってたの？」

「いいや、その時はそんなことを思ってたなかった。母さんを殺してやろうと本気で思ったのは、アルバムを見た時。母さんは僕の施設の友達と撮った写真をもらってたんだ。写真をもらって来てるのな

ら、なぜ僕を引き取ってくれなかったのか？　そう思うと、苛立ちと殺意が自分の中で押さえきれなくらいに大きくなってた」

博文は両手の拳を強く握り、怒りを押さえている。

「春美さんはなんで突き落としたの？」

京子は博文のほうを見ながら聞いた。

「宏明さんの言うとおり、殺害しようとも思っていた。でも、今まで育ててくれたのかと思うと、殺害なんて出来なくて突き落とすだけになってしまった。義母さんを殺害する理由はないんだ」

「遺書はどうしたんだ？　遺書には恵子さんの指紋しかついてなかったが…」

気になっていたことを聞いてみた谷崎警部。

「インターネットカフェで遺書を打ち、自分の指紋がつかないように手袋をして、カバンの中に入れたんだ。母さんを殺害した後、ロ―プで吊るす前に母さんの指紋をつけたんだ」

博文は遺書の指紋について説明した。

「そうだったのか…」

谷崎警部は納得しながら頷いた。

「博文君、さっき姉さんを殺害する理由なんてないって言ってたけど、本当はちゃんとした理由があるんじゃないの？」

「理由なんて本当はないんだ」

「理由がないと殺したいなんて思わないじゃない？」

夏美はさらに追及する。

それは姉妹だからだろうか。

博文は本当のことは何も答えないままにいる。

「博文さん、本当の事を言ってもらえませんか？　このままじゃ、育ての親である叔父さんと叔母さんに申し訳ない。それに、生みの親である恵子さんにも…」

宏明は博文に近付きながら説得した。

「義母さん、恵子さんが僕の本当の母親だということを知ってたんだろ？」

「それは知らなかった。さっき初めて知ったんだから…」

「ウソだろ?! 義母さんと恵子さんが、僕に本当のことを言わないでおこうと相談して隠してたんだろ?! 義父さんだって!!」

博文は広次と春美に激しい口調で問いたです。

そんな博文に動揺してしまう二人。

「博文が恵子さんが息子だと知らなかったんだ。隠してなんかいないんだ。これだけは信じて欲しい」

広次は必死に否定する。

「叔父さんの言ってることは本当だぜ、博文さん。恵子さんの日記帳に全ての想いが全て書かれているんだ」

そう言うと、宏明は博文に恵子の日記帳を渡した。

博文は宏明があらかじめ開いていたページの日記帳を読んだ。

「これは…」

「あなたが自分の子供だと気付いた時、誰にも言わなかったんだ。

この山崎家で幸せな家庭を築いているあなたのことを思ってたね!!」

宏明も内心必死になりながら、博文に恵子の想いを伝える。

「母さん…」

宏明の想いが届いたのか、博文は一粒の涙を流した。

「恵子さんの息子だと知って、叔父さんと叔母さんのことを、未だに“義父さん、義母さん”と呼んでいるあなたを見ると、叔父さんと叔母さんには言えなかったんだ」

宏明の言葉に、倒れ込むように泣いた。

宏明は博文を見据えていたが、その他の全員は、心なしかどこかホッとした様子だった。

恋が実る時

その日の午後、宏明達はそれぞれの家へと帰ることになった。

あれから博文は谷崎警部と田村刑事と共に、悲しい表情をしながら署へと向かった。

そして、博文は広次と春美にこう告げた。

「十二年間、ここまで育ててくれてありがとう。山崎家で過ごした日々は忘れない。楽しい思い出がたくさん出来た。もし、生まれ変わることがあるのだったら、義父さんと義母さんの本当の子供に生まれるたい」と――。

博文の言葉に、二人は涙で頷いた。

「宏明君、また来てくれよ」

「わかった！」

元気よく返事する宏明。

「あ、明兄さん、ちよつと…」

宏明は明の服を引っ張り、みんなから離れたところに呼ぶ。

「なんだよ？」

「あの人のことどうするんだよ？ 告るのかよ？」

「いいよ。フラれたら嫌だし…」

弱気な声で答える明。

「恋を实らせたいって言ってたじゃねーか」

「言ってたけどやっぱいいよ」

明は笑いながら言う。

「そんなんじゃ、一生恋は実らねーよ」

「そうだけど…」

明はどうしようか悩みながら頭をかく。

「二人で何コソこ話してんのよ？」

夏美が二人をのぞきこむ。

「呼ぶぜ。みきさんっ！」

宏明はいてもたってもいられず、玄関で見送りをしているみきを呼ぶ。

「オ、オイッ！！ 宏明！！」

急な展開に混乱する明。

「明兄さんが話があるんだってさ」

宏明はイタズラな目で明を見ながら言う。

「なんですか？」

みきは宏明から明に顔を向ける。

「あ、あの：実は：ずっとみきさんのことが好きで：。もし、良かったら：オレと付き合ってください」

明は顔を赤くしながら、みきに自分の想いを告げる。

突然のことでみきはどうしていいのかわからないでいる。

「私なんて、家政婦の身なもので：」

「やっぱり無理ですよ。オレなんて：」

「いえ、そうではなく：」

慌てて否定するみき。

「私なんかが明さんのお相手なんて務まるはずないと思ってて：。それに、私マイペースでボーッとしてるから：」

「それがいいんだって。みきさんらしくいれば、ね」

「明さん：」

照れながら明を見るみき。

「で、返事のほうは：？」

「はい、お願いします」

みきはOKの返事をした。

「カップル誕生じゃーん！！」

京子が嬉しそうに大声で言う。

「ホントだ。おめでとう、明さん」

茂は明に言う。

「ありがとう」

「とりあえず、みきさんには今まで以上に頑張ってもらわないとな」
広次は笑顔で言った。

その隣で春美も微笑んでいる。

「じゃあ、そろそろ行こうか？」

「そだね」

「宏明、ありがとうな！」

明は最高の笑顔をしながら手を振る。

「うん！　なんかあったら言ってくれよ！」

宏明は明に言うと、叔父の広次が建てた家に目をやった。

「ヒロ、今回は大変だったね」

電車の中で京子がため息まじりで言う。

「うん。明兄さんがみきさんのこと好きだって相談されて知ってたから余計に大変だった」

やっと安心しきった声を出す宏明。

「みきさん、嬉しそうだったね。私達が来てから春美さんにキツイこと言われてばかりで、笑顔を見たことなかったもん」

紀美の脳裏には、みきの泣きそうな表情が浮かんだ。

「まあな。なんか、親子の絆が強いってのがわかった気がする」

茂は改まった言い方になる。

「恵子さんと博文さんは、あんなに近くにいたのにお互いのことを思っ、て、本当のことが言えなかったんだよね」

紀美の言ったことに三人も同感する。

——親の気持ちはなかなか気付かねーもんだ。子供を思いやる気持ちとかな。

宏明は心の中でそっと思った。宏明の両親は、あまり仲は良くない。たまに離婚したらいいのに…と思うことがあるが、宏明達子供のた

めに離婚しないんだと思っている。

「明さんとみきさん、幸せになって欲しいよね」

「うん！ 絶対に！ あの二人はきっと幸せになる！！」

京子は両手を力強く握って言った。

「あの二人なら大丈夫でしょう。なっ？」

茂は宏明に同意を求めるように、さらりと言ってしまう。

「ああ：あの二人なら何でも乗り越えていけるぜ」

宏明は電車の窓の景色を眺めながら返事した。

——いつまでも、この空は変わらないで欲しい。そして、親子の絆も…。

もうすぐで宏明が住む街に着く頃、宏明はそう思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8575e/>

大学生探偵シリーズ イギリス館殺人事件

2010年10月21日22時38分発行